

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2012/08/01

米金融政策と欧州債務問題の2軸相場

通貨ペア	基調		ページ数
<u>ドル/円</u>	➡	9月FOMCを睨んで 予想レンジ: 76.00 ~ 80.50 円	2-3
<u>カナダ/円</u>	↗	「円」の動向がカギに 予想レンジ: 74.40~ 81.00 円	4-5

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2012 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

USD / JPY

ドル/円 7月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	79.92円	80.09円	77.94円	78.10円



①	5日、ゴトー(5・10)日の仲値公示に向けた円売り・ドル買い等により80.09円の高値をつけたが、その後日経平均の下げを受けた円全面高の流れに乗ってドル/円は失速。その後、米6月ADP全国雇用者数が17.6万人増と市場予想(10.0万人増)を大きく上回ったことから一旦反発したものの、米6月ISM非製造業景況指数52.1と予想(53.0)より弱い結果になったことでこの日の高値目前で上げ幅を縮めた。
②	6日、米5月失業率は8.2%と市場予想通りだったものの、非農業部門雇用者数が8.0万人増と予想(10.0万人増)を大きく下回ったことからドルは下落した。
③	11日、ユーロ/円の上昇にドル/円は連れ高した。その後発表された米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録では「追加の刺激策はおそらく必要になると数人が主張」「債券購入は国債市場を阻害する可能性がある」と数人が指摘等と、量的緩和第3弾(QE3)観測を強めるものではなく、反応は限られた。
④	12日、日銀が短期国債購入額を5兆円程度増額すると発表すると、79.95円まで上昇。しかし、同時に固定金利オペを5兆円減額すると発表したことから、ドル/円はすぐに失速。その後、白川日銀総裁が定例記者会見で「当座預金の付利の引き下げは考えていない」と発言すると下げ幅を拡大した。
⑤	16日、米7月NY連銀製造業景況指数が7.39と予想(4.00)を上回ったものの、米6月小売売上高が前月比-0.5%と予想(+0.2%)外の減少が伝えられたことでドル/円は失速。また、国際通貨基金(IMF)が2013年の世界経済見通しを下方修正したこともドル/円の重石になった模様。
⑥	17日、米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長が上院の半期金融政策報告で「FRBは一段の行動をとる用意がある」としつつも、「量的緩和はリスクをもたらす。安易に活用すべきでない」と発言したことから、ドル/円相場の動きは限られた。
⑦	18日、バーナンキFRB議長が下院の半期金融政策報告で「雇用に十分な進展がないと結論づけられればFRBが追加措置を講じることは可能」と発言すると、米追加緩和観測が強まりドル/円は下げた。
⑧	23日、スペインの地方財政やギリシャの金融支援についてなどの不安を背景にユーロ/円主導で円が全面高になる中、ドル/円は77.94円まで下落。ただ、日本の円売り介入への警戒感も強く、その後過去最低水準まで低下した米10年債利回りが下げ幅を縮小すると、ドル/円も値を戻した。
⑨	27日、米4-6月期国内総生産(GDP)・速報値が前期比年率+1.5%と事前予想(+1.4%)を上回るとドル/円は上昇。米国債利回りの上昇も相まって78.67円まで値を上げた。
⑩	30日、日経平均が上げ幅を縮小し、全般的に円高が進んだ他、月末を睨んだ本邦企業からと見られるまとまった規模の円買いが入ったことで78.12円まで値を下げた。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

USD / JPY

今月のポイント

2012年7月のドル/円相場は77.94～80.09円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約2.2%の下落(ドル安・円高)となった。この月は、中盤以降に日銀の追加金融緩和期待が後退した一方、徐々に米連邦公開市場委員会(FOMC)への追加量的緩和(QE3)観測が強まったことからドル売り・円買いが強まった。ただし、ドル/円が78.00円付近まで値を下げると本邦政府・日銀による円売り介入への警戒感が強まったこともあり、底堅い推移となった。

ドル/円の本質的な材料は日米の金融政策の動向になるだろう。日本については、3カ月以上にわたって空席が2つあった日銀審議員をハト派と見られる2人の新メンバーが埋めて初めての日銀金融政策決定会合(8—9日)が行われる。ここで、以前よりも日銀のスタンスが緩和的に変化するようだと、これまでの円高進行に歯止めをかける一因となるかもしれない。米国については、まずは1日に発表される米連邦公開市場委員会(FOMC)の声明に注目される。今回のFOMCでの政策変更はないと見られているが、今後のFOMCに向けた布石(景気判断下方修正や異例の低金利に据え置く期間の延長等)があるのでは、との期待は高い。また、その後の米7月雇用統計など各種経済指標、8月31日の米連邦準備制度理事会(FRB)のバーナンキ議長の講演などから、QE3導入の時期をはかっていく展開になるだろう。9月QE3導入観測が高まればドルの売り材料となる。

ただ、もちろん78円割れの水準では本邦政府・日銀による円売り介入観測が台頭しやすいため、ドル/円の下げ足はそう速いものにはならないだろう。なお、実際に介入が行われれば想定レンジを超えた大幅な上昇になる可能性がある。またドル/円がジリ安基調を辿れば、「介入と誤認されるようなまとまった規模のドル売り・円買い注文」による急な乱高下が起こることもあり得る。(ジェルベズ)

(予想レンジ: 76.00～80.50円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

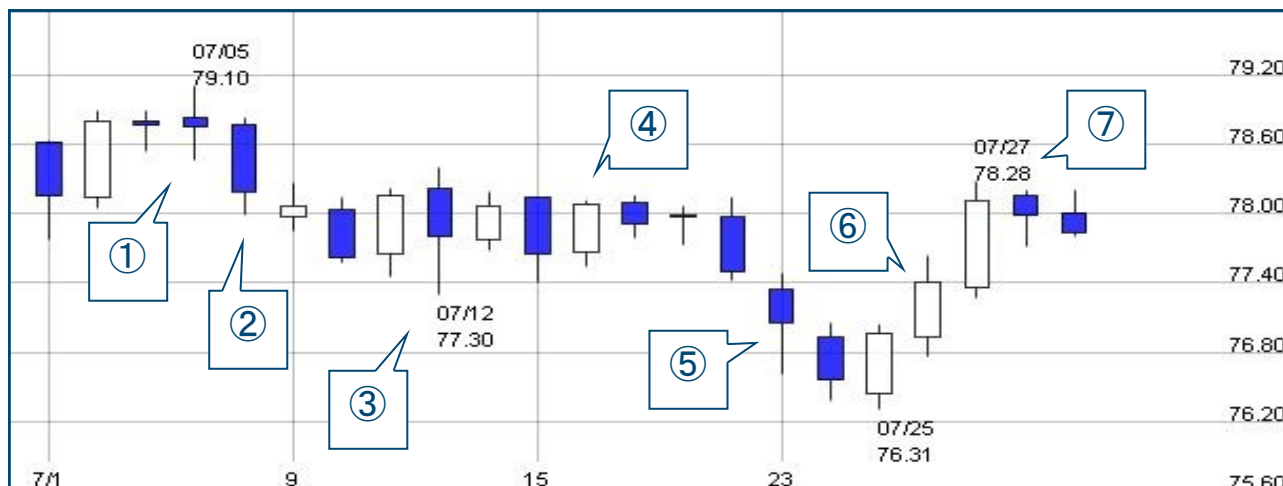
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
8/1(水)	7月米ADP全国雇用者数	8/15(水)	8月米ニューヨーク連銀製造業景気指数
	7月米ISM製造業景況指数		7月米鉱工業生産
	FOMC政策金利発表	8/16(木)	7月米住宅着工件数
8/2(木)	欧州中銀金融政策発表	8/17(金)	7月米ミシガン大消費者信頼感指数・速報値
8/3(金)	7月米雇用統計	8/21(火)	FOMC議事録(7月31日・8月1日分)
	7月米ISM非製造業景況指数	8/22(水)	7月日通関ベース貿易収支
8/8(水)	6月日経常収支	8/24(金)	7月米耐久財受注
8/9(木)	7月中国消費者物価指数	8/28(火)	8月米消費者信頼感指数
	日銀金融政策決定会合(8日～発表)		8月米フィラデルフィア連銀景況指数
	6月米貿易収支		8月米リッチモンド連銀製造業指数
8/13(月)	第2半期日GDP・一次速報	8/29(水)	第2四半期米GDP・改定値
8/14(火)	日銀金融政策決定会合議事要旨(7月11日・12日分)	8/31(金)	8月米シカゴ購買部協会景気指数
	7月米小売売上高		バーナンキFRB議長講演

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

CAD/JPY

カナダ/円 7月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	78.62円	79.10円	76.31円	77.84円



①	5日、中国人民銀行が0.25%の利下げを発表した事や、米6月ADP全国雇用者数が予想を上回った事を受けてリスク志向が高まると、カナダ/円は79.10円まで上昇した。しかし、米6月ISM非製造業が予想を下回った事などからNYダウ平均株価がマイナス圏で推移すると、カナダ/円は79円を割り込んだ。
②	6日、加6月雇用統計は失業率が7.2%と予想(7.3%)を下回り、雇用ネット変化は0.73万人増と予想(0.50万人増)を上回る強い結果となった。しかし、同時に発表された米6月雇用統計が弱い結果となった事を受けて時間外のNYダウ先物が急落すると、カナダ/円は下落。その後、現物のNYダウ平均株価が大幅下落で始まると78.02円まで下値を切り下げた。
③	12日、日銀が金融政策決定会合後の声明で「短期国債買い入れオペを5兆円前後増額」を発表すると瞬間的に円売りが優勢となってカナダ/円は上昇。しかし、「固定金利オペを5兆円減額」とも発表すると、結果的に緩和が見送られたとの見方が広まって円買い戻しが優勢となり、急速に値を下げた。
④	17日、カナダ中銀(BOC)は政策金利を予想通り1.00%に据え置いた。声明で「金融刺激策の緩やかな解除が適切になる可能性がある」として引き締めスタンスを維持すると、カナダ/円はわずかに上昇したが、同時に2012年と2013年の経済成長率見通しを下方修正(2012年:2.4%から2.1%、2013年:2.4%から2.3%)したため伸び悩んだ。
⑤	23日、前週末にスペイン紙が、「バレンシア州に続き6つの州が中央政府への支援要請を検討している」と報じたことや、独誌が「国際通貨基金(IMF)はギリシャへの融資実行を停止する」「そのため、同国は9月に債務不履行に陥る可能性が高まる」などと報じた事を受けてリスク回避の動きが強まると、カナダ/円は取引開始から売り優勢となり、一時77円台を割り込んだ。
⑥	26日、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が「政府の借り入れコストが不当に上昇している事への対処を含め、ユーロ圏を崩壊から守るためにできる事を、責務の範囲内で何でもする用意がある」と発言した事を好感して欧米株価が大幅に上昇すると、カナダ/円は77.64円まで反発した。
⑦	27日、米第2四半期国内総生産(GDP)が予想を上回った事や、ドラギECB総裁がバイトマン独連銀総裁と「新たな措置」について協議しているなどと伝えられた事を好感してNYダウが約3ヶ月ぶりに13100ドル台に上昇すると、カナダ/円は78.28円まで上昇した。

CAD/JPY

今月のポイント

7月のカナダ/円相場は76.31円～79.10円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約0.9%の下落(カナダドル安・円高)となった。世界的な景気減速に対する懸念と米欧の金融緩和に対する期待が入り混じる形で、投資家のリスク志向に強弱感が現われにくい展開となり、カナダ/円は小幅に下落した。もっとも、7月のカナダドルは米ドルやユーロに対しては上昇していることから、カナダドルが売られたのではなく、円が買われた事がカナダ/円下落の原因と言える。8月1日の米FOMCや2日のECB理事会の結果次第という面はあるにせよ、米欧の金融政策が緩和強化の方向に向かう中で、資源国通貨であり将来的な利上げの可能性を示唆している数少ない国の通貨であるカナダドルには引き続き上昇圧力がかかりやすいと考えられる。その一方で、7月同様に円の上昇が8月のカナダ/円相場の足を引っ張る可能性もありそうだ。7月に円が上昇した要因の一つが日銀の緩和姿勢であろう。米欧で金融緩和観測が高まる中、日銀は7月12日の金融政策決定会合で結果的に追加緩和を見送り、白川総裁の会見でも追加緩和に前向きな姿勢は見られなかった。ただ、8月9日の日銀金融政策決定会合からは、緩和積極派と見られる2名の新審議委員が参加する。これを機に日銀が緩和姿勢を強化する事になれば円の上昇余地は限られるだろう。(神田)

(予想レンジ:74.40～81.00円)

今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
8/1(水)	7月米ADP全国雇用者数	8/13(月)	第2四半期本邦GDP・一次速報
	7月米ISM製造業景況指数	8/14(火)	7月米小売売上高
	米FOMC政策金利発表	8/15(水)	7月米鉱工業生産
8/2(木)	欧州中銀金融政策発表	8/21(火)	FOMC議事録(7月31日・8月1日分)
8/3(金)	7月米雇用統計	8/22(水)	7月通関ベース貿易収支
	7月米ISM非製造業景況指数		6月加小売売上高
8/7(火)	6月加住宅建設許可	8/29(水)	第2四半期米GDP・改定値
	7月加Ivey購買部協会指数	8/31(金)	第2四半期加GDP
8/9(木)	7月中国消費者物価指数		6月加GDP
	7月中国鉱工業生産		バーナンキ米FRB議長講演
	日銀金融政策決定会合(8日～)		
8/10(金)	7月加雇用統計		

巻頭の特記事項を必ずお読みください。